

第 2 学 年 算 数 科 学 習 指 導 案

1 単元名 「かけ算（１）」

2 単元目標

- かけ算に関心をもち、身の周りからかけ算で表せる数量の場面を進んで見つけようとする。
(関心・意欲・態度)
- かける数が1増えると積はかけられる数だけ増えることを使って、九九を構成することができる。
(数学的な考え方)
- かけ算の式に表したり、九九を唱えたり、それを適用して問題を解くことができる。
(技能)
- 記号「×」や用語「かけ算」「～ばい」の意味、単位とする大きさのいくつ分かを求めるときに、かけ算を用いればよいことが分かる。
(知識・理解)

3 単元計画（全17時間）

次	時	型	主な学習活動	主な評価規準
一	1 本時	活用	乗り物を見て、同じ数ずつ乗っている物を見つけ、「何個のいくつ分」という表し方をする。	(考)具体的な活動を通して、「基準量のいくつ分」という考え方ができる。
	2	習得	「4人の3台分」からかけ算の意味と式の書き方を知り、答えの求め方を考える。	(知)かけ算の意味とかけ算の式について理解する。
	3	活用	問題場面から「何cmのいくつ分」かを考え、かけ算の式にかき、たし算で答えを求める。	(考)かけ算の用いられる場面を式にかき、その答えの求め方を考えることができる。
	4	習得	長さをもとに、「倍」の意味とかけ算について知る。	(知)「倍」の意味について理解する。
二	1	活用	問題場面から、答えがいくつずつ増えているかを調べ、5の段の九九を構成する。	(考)5ずつ増えることを使って、5の段の九九を構成することができる。
	2	習得	5の段の唱え方を知り、覚える。	(技)5の段の九九を唱えることができる。
	3	活用	5の段の適用題を解いて、九九の練習をする。	(考)5の段の九九を用いて、適用題を解くことができる。
	4	習得	問題場面から2の段を構成し、2の段の九九の唱え方を知る。	(技)2の段の九九を唱えることができる。
	5	活用	2の段の適用題を解いて、九九の練習をする。	(考)2の段の九九を用いて、適用題を解くことができる。
	6	習得	問題場面から3の段を構成し、3の段の九九の唱え方を知る。	(技)3の段の九九を唱えることができる。
	7	活用	3の段の適用題を解いて、九九の練習をする。	(考)3の段の九九を用いて、適用題を解くことができる。
	8	習得	問題場面から4の段を構成し、4の段の九九の唱え方を知る。	(技)4の段の九九を唱えることができる。

	9	活用	4の段の適用題を解いて、九九の練習をする。	(考)4の段の九九を用いて、適用題を解くことができる。
	10	活用	2～5段の九九を使い、基準量が後に示された適用題を解く。	(考)基準量が後に示された適用題を解くことができる。
	11	活用	身の回りからかけ算になる問題を見つけ、問題カードを作る。	(関)進んでかけ算の問題を作ろうとしている。
三	1		「たしかめ道場」で学習のまとめをする。	(技)2～5の段の九九の構成を理解し、計算することができる。
	2		本単元のまとめテストをする。	(考)九九の構成の仕方を考えることができる。 (技)2～5の段の九九を活用して適用題を解決することができる。 (知)九九の構成の仕方を理解している。

4 指導上の立場

(1) 単元について

本単元は、第2学年の学習内容の中でも重要視されている「かけ算」(九九)である。本単元では、そのうち「2～5の段」を扱い、次単元で「1・6～9の段」を扱うこととなっている。学習指導要領に「乗法九九について知り、1位数と1位数の乗法の計算が確実にできること」(A-(3)-ウ)と書かれているように、第2学年のうちに児童全員が確実に身に付けておかなければならない内容である。

乗法九九について知るためには、まず、乗法九九が用いられる場合を知ることが大切である。それは、一つ分の大きさが決まっているときに、そのいくつ分に当たる大きさを求める場合である。本単元では、児童にとって身近である「遊園地」という場面を設定することで、かけ算への学習意欲を高める。そして、その乗り物の人数を数える活動を通して、「1台の人数が同じ」で「何台かある」という視点から、「基準量のいくつ分」という考え方を定着させていきたい。

学習指導要領には「乗法に関して成り立つ性質として、乗数が1ずつ増えるときの積の増え方を知り、九九を構成したり計算の確かめをしたりすることに用いること」(A-(3)-イ)とある。よって、かけ算の九九を学習する際には、ただ九九を暗唱することだけ、とならないように以下のように配慮する。まず、数図ブロックを操作したり図にかいたりして、積の増え方を視覚的にとらえられるようにする。そして、「いくつずつ増えている」という乗法の性質を理解し、九九の構成へとつなげていきたい。また、この性質を覚えておくことで、九九を忘れてしまった場合でも、たし算やひき算を用いて解決することができる。

(2) 児童の実態について

(3) 研究テーマとの関連について

○ 考えをもたせる工夫

児童が自分の考えをもつことができるように、まず、児童に問題場面を正しく理解させたい。そのために、問題場面として児童にとって身近である遊園地を取り上げる。そして、大型テレビに映し出すことで学習意欲を高め、児童が問題場面をとらえやすくなるようにする。

自力解決の前には、学習課題とワークシートの書き方を学級全体で確認することで、児童が自力解決に向かうことができるようにする。また、黒板に学習課題とワークシートの書き方を示しておくことで、児童が自分で確かめることができるようにする。

○ 考えを交流させる工夫

学級全体の発表の前に、ペア学習を取り入れる。児童が隣の友達とお互いにアドバイスをすることで、自分の考えに自信をもたせ、全体発表への意欲を高めていきたい。

全体発表では、それぞれの乗り物の数え方を、複数の児童で交代しながら発表させることで、それぞれの数え方を学級全体に広げていきたい。

○ 考えを確かにさせる工夫

児童がそれぞれの乗り物の数え方を発表した後で、簡単に数えられる乗り物の共通点を教師が問いかける。その際、図に1台あたりの人数を数字で書き込んでおくことで、児童が「同じ数字が並んでいる」ことに気づくことができるようにする。そして「1台の人数が同じ」乗り物が「何台かある」ことを「何このいくつ分」という言葉でまとめていきたい。

その後、児童に「何このいくつ分」の適用問題を解かせることで、基準量をもとにした考え方が身に付くようにする。

○ 習熟度を意識した指導方法の工夫

本時では、複数の乗り物が出てきたり図にかいたりするため、ワークシートを活用する。ワークシートに書き込むことで、児童が自分の考えを整理したり、友達の考えを理解したりする際に役立てることができる、と考える。また、教師が黒板にかく際にも、ワークシートと同じレイアウトとなるように配慮する。

児童の中には、図にかくことが難しいと感じる児童もいると考えられる。そこで、乗り物の人数を数える際には数図ブロックを活用し、数図ブロックを並べた様子をワークシートにかくようにする。また、最初の乗り物は学級全体で数図ブロックを操作し図にかくようにすることで、図をかくことへの一助としたい。そして、児童の思考が段階的に抽象化していくことができるようにしていきたい。

レディネステストからは、基準量をもとにした数え方が苦手な児童がいることが分かった。本時では、すべての乗り物の人数を数えられないことが考えられる。そこで、人数を数える乗り物の順序をあらかじめ決めておく。始めに基準量がない乗り物、その次に「2とび」「5とび」で数えられる乗り物とする。順序を決めることで、児童が最後の乗り物まで人数が数えられなくても、「基準量がないもの」と「基準量があるもの」を数え、比較できるようにする。

5 本時案（第1次 第1時）

目 標	「何このいくつ分」という基準量をもとにした数え方で考えることができる。
学習活動	○教師の支援 ■習熟度を意識した指導
1 問題を知り、本時のめあてをつかむ。	<p>○ 遊園地の絵を大型テレビで提示し、どんな乗り物があるかを発表させることで、児童の学習意欲を高め、問題場面をとらえることができるようにする。</p> <p>○ 観覧車，ゴーカート，コースターでは，どの乗り物の人数が1番多いかを予想させ，児童が数えやすい乗り物と数えにくい乗り物があることに気づくことで，本時の課題に目を向けることができるようにする。</p>
数えやすいひみつを見つけよう。	
2 乗り物の人数を数える。	<p>■ ワークシートを配布し，学習課題とワークシートの書き方を学級全体で確かめることで，どの児童も自力解決に臨めるようにする。</p> <p>■ 観覧車の人数を図にかくまでを学級全体で行う。数図ブロックを操作し，図にかく活動を全体で行うことで，図にかくことが難しい児童も自力解決に取り組むことができるようにする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">【予想される記入例】</p> <p>観覧車 : 3・2・4・3・2 → 14 △</p> <p>ゴーカート: 2・2・2・2・2 → 10 ○</p> <p>コースター: 5・5・5 → 15 ○</p> </div> <p>○ 児童が自分の考えを発表できるように，「数えやすい」「数えにくい」と判断した理由をワークシートに書き留めておくよう助言する。</p> <p>■ 自分で数えることができにくい児童には，教師と一緒に図をかいたり，すべての乗り物を数えられなくてもよいことを知らせたりして，安心して自分で数えることができるようにする。</p>
3 自分の数え方を発表し合う。	<p>○ 初めにペアで考えを発表し合い，互いにアドバイスをすることで，自分の考えに自信をもったり，友達の考えを認めたりすることができるようにする。</p> <p>○ 学級全体で発表する際には，教師が児童の考えをワークシートと同じように板書することで，聞いている児童が考えを理解できるようにする。また，発表をあえて途中で区切り，1つの乗り物について複数の児童で発表させることで，考えを学級全体に広げるようにする。</p> <p>○ それぞれの乗り物の数え方が出た後で，教師が「数えやすい乗り物にひみつがあるのかな？」と児童に問いかけ，事前に1台あたりの人数を黒板に数字で書き込んでおくことで，児童が「同じ数字が並んでいる」ことに気づくことができるようにする。</p> <p>○ 児童の考えを「何このいくつ分」という言葉でまとめることで，児童が「基準量のいくつ分」ととらえることができるようにする。</p>

4 適用題をする	○ 2と5を基準量にした問題を「何このいくつ分」で書かせることで、基準量をもとにした考え方が身につくようにする。
5 まとめをする。	
「何このいくつ分」だと数えやすい。	
6 学習をふり返る。	○ 児童にシートへ振り返りを書かせることで、児童が今日の学びを確かめることができるようにすると共に、教師が児童の実態を把握し、次時の学習に生かすことができるようにする。
【評価基準】 A：「何このいくつ分」で表せる場合は数えやすいことに気づき、その考え方で表すことができる。 B：「何このいくつ分」で表すことができる。	
【評価方法】 発言，ワークシートへの記述，振り返りシート	

6 板書計画

め) 数えやすいひみつを見つけよう。

ま) 「何このいくつ分」だと数えやすい。

【のり物】	【図】	【答え】	【数えやすさ】	【わけ】	【まとめて】
かんらん車	$\overset{3}{\text{○○○}}$ $\overset{2}{\text{○○}}$ $\overset{4}{\text{○○○○}}$ $\overset{3}{\text{○○○}}$ $\overset{2}{\text{○○}}$	1 4	△	→ ばらばら	
ゴーカート	$\overset{2}{\text{○○}}$ $\overset{2}{\text{○○}}$ $\overset{2}{\text{○○}}$ $\overset{2}{\text{○○}}$ $\overset{2}{\text{○○}}$	1 0	○	→ 同じ	「2, 4, …」 2この5つ分
コースター	$\overset{5}{\text{○○○○○}}$ $\overset{5}{\text{○○○○○}}$ $\overset{5}{\text{○○○○○}}$	1 5	○		「5, 10, …」 5この3つ分

れんしゅう

名前

☆「何このいくつ分」と書きましょう。

①



②



③



算数ふりかえりカード

かけ算（１）

名前（ ）

	学しゅうすること	がんばり	かんそう
1	人の数を数えよう		-----
2	「かけ算」について考えよう		-----
3	かけ算のしきにあらわそう		-----
4	「何ばい」について考えよう		-----
5	5のだんの九九を作ろう		-----
6	5のだんの九九をおぼえよう		-----
7	5のだんの九九をつかおう		-----
8	2のだんの九九を作ろう		-----
9	2のだんの九九をつかおう		-----

算数ふりかえりカード

かけ算（１）

名前（ ）

	学しゅうすること	がんばり	かんそう
10	3のだんの九九を作ろう		-----
11	3のだんの九九をつかおう		-----
12	4のだんの九九を作ろう		-----
13	4のだんの九九をつかおう		-----
14	2～5のだんの九九をつかおう		-----
15	もんだいづくりをしよう		-----
16	れんしゅう		-----
17	たしかめよう		-----

ふりかえって

